

生の無常假現なることを認知して絶対無我の境に體達したる曉即ち大悟徹底宇宙と合一したる境に於いて、始めて宇宙を以て不生不滅常住の相と見るべきである、されば古來の禪者は皆此信念によりて人心の執着を離れ、生物の最大苦痛とする死をすら超絶することを得て居る、即ち梵了和尚は其臨終に

經過七十餘年事。寵辱悲懼夢一場

と説き、大智禪師は

百年三萬六千日、胡蝶夢中空度^{ニクニ}春

と説かれたが、苟くも醉生夢死の徒にあらざる限りは、何人も一夢のやうに觀するであらう、西洋の詩人は「謂ふ勿れ人生夢なり」と戒めて居るが人生は變幻暫有のものにして其の夢の如きものである、されば夢窓國師は

夢の中は夢と思ふも夢なれば

夢にあらずといふも夢なり

と咏はれた、是れ宇宙人生を智情合一の上より眺めたる眞理であつて、決して方便的に説いたものではない、勿論此くの如き觀念を以て人生に處すれば、精神の修養に資する所あるはたしかである、華嚴經に

世間種々の法、一切幻の如し、若し能く是くの如く知らば其心動く所なし

とあるは即ち其證である、併し修養となるが故に斯く觀すべしといふが如き方便觀ではなく、確かに宇宙一面の眞相である

既に斯く宇宙人生の眞相を徹見したる以上は、世上の毀譽褒貶、其他天災人禍の如き毫も顧慮するに足らぬ、夢窓國師嘗て野武士の爲めに打擲せられし時、侍僧にして曾て北面の武士なりし者大いに憤り、之れに復讐せんとしたる時に當り、國師之れを誠めて

打つ者も打たるゝ者も諸共に

たゞ一時のゆめの世の中

と詠じ従容として居られたといふことである、又嘗て是非善惡の褒貶に苦悶して意氣沮喪せる英雄を慰めて

雪よりも高き所に出で、見よ

なにとて月の隔てやはする

と詠じて之れを鞭撻せられたといふ

又北條時宗の師であつて圓覺寺の開祖たる佛光國師祖元和尙が、まだ在宋の當時、元の兵に捕はれ斬に處せられんとした時、従容として怕ぢず

乾坤無地卓孤筇。喜得人空法亦空。珍重大元三尺劍。電光影裡斬春風。

といふ一首の偈を打した爲めに、元の兵其の大悟徹底せる精神に感動して遂に之れを放還し去つた、北條時宗が蒙古の大軍を撃攘して掀天翻地の大活劇を演じたのは、正に是れ祖元禪師の徹底せる人生觀を國家の爲めに利用したる効果である、有少辨藤原俊基が關東征伐の密謀漏れて北條氏の爲めに捕はれ、斬に處せられし時に

古來一句、無死無生、萬里雲盡、長江水清

の偈を口ずさみて、泰然自若として居つた、又右少辨藤原資朝が佐渡に殺さるゝに當りて

五蘊假成形。四大今歸空。將首當白刃。截斷一陣風。

といふ一偈を詠じて、従容迫らざりしが如き、或は甲州慧林寺の僧快川和尙が織田信長の爲めに焼き殺さるゝ時

安禪不必須。山水滅却心頭火也涼。

と言つて泰然として大火裏に安坐して斃れし如き又明智光秀の辭世に

逆順無二門。大道徹心源。五十五年夢。覺來歸一元。

とあり、朝倉義影が

七轉八倒。四十年中。無自無他。四大本眞。

の偈を詠じたる如き、皆是れ流動變化の宇宙人生の眞實相を徹底體達したるが爲めで

ある、獨り禪僧や武人のみならず、文人の如き者も亦一度禪的宇宙觀に徹底したる者は容易に生死を解脱して居る

來山は生れた咎で死ぬるなり

それで恨も何もかもなし(來山)

荒波へ船から投ぐる氷かな(超波)

の如き男性的に死を喝破したるものである、本來宇宙の萬象殊に動物の身體の如きは久遠の歲月を経て繼續發達したるものであるが、要するに元素の暫有的假和合に過ぎぬものだから或一定の力を加ふれば、之れを解體分散せしむることは容易である斯くの如く脆弱なる身體を以て永久不朽のものと固執するは迷妄も亦甚だしきものと言ふべきである、故に吾人は身心本來空なることを悟り、絶對無我の境に安住するを得ば、白刃頭上に下るも、電光影裡に春風を斬ると見、たとへ炎々たる大火裡に陥るも心頭を滅却すれば火も亦涼しと悠々たることが出来る永嘉大師が

曹谿の道を認得してより、生死相關らざることを了知す、行も亦禪坐も亦禪、語黙動靜體安然、縦ひ鋒刀に遇ふとも常に坦々、假饒毒藥も亦閑々

と喜ばれたのは、即ち五蘊の現象本來空にして本體の不生不滅なるを大悟したるものは既に生死相對の境を超絶せるを以て、毒藥鋒刀毫も怕るに足らぬものである、否單に人生唯一度來るべき死のみにあらず、日常生活の上に屢々遭遇すべき毀譽榮辱に於ても、毫も意に介するの要がない、永嘉大師更に又

幾度か生じ幾度か死す生死悠々として定止なし頓に無生を悟了してより諸の榮辱に於て何ぞ憂喜せむ

と示されたるは、能く人生の真相を洞破したる達人の言である、吾人が一度宇宙人生の夢幻空華の如きを認知し、大無我の境地に體達したならば、宇宙の變化生滅、人生の禍福榮辱の如きは毫も我と關せざること、恰も蓮の泥中にありて、毫も是れに感染せざるが如きものである、而して人心の性質として、既に一切の相對的苦樂を超絶し

たる時は單に苦樂なき死滅的心狀に止まらずして、進んで絶對的自然的幸福を感じる
ことが出来る、譬へば船に乗つて怒濤の中にあらむか、戰々競々として恐怖の念に滿
たさるゝも、一度岸上に乗つて徐むるに大海の波瀾怒濤を眺むれば、毫も恐怖の念な
く靜かにその真相を見得べきのみならず、却つて壯美の感を爲すであらう、圓旨和尚
は

孤松三尺竹三竿。招我時々倚欄。細雨隨風斜入座。輕烟籠月薄遮山。沙田千畝牛

馬瘦。野水一溪鷗鷺閑。自笑可休休未得。浮雲出岫幾時還

と自然の風光に雅懷を述べ、また師侃和尚は

寂寞山房春又和。曾無人跡到柴扉。尾頭自有一溪水。洗盡多年兩耳非

と詠じ、紛々たる人爲を離れたる自然の山水を樂み、その死に臨みては

隨緣出生。隨緣入死。本來面目。青山綠水

と咏じ生涯を因緣の作用に一任し、毫も人生に執着する所なく、超然として安然たる

心事、皆多少積極的に宇宙の一面を樂むに至つたのである

更らに稍々積極的に自然を樂み往々にして今日の所謂樂天思想ならざるかを疑はしむ
るものがある、即ち大愚和尚の偈に

春到人間廣大慈。一花擎出一如來。無端殘雪消鎔盡。萬象森羅齊展眉

と吟じ又龍宗和尚は

佛身充滿法界。一夜落花雨。普現一切群生前。滿城流水香

とあるが如きは、一見殆ど人生そのものを、正當なる宇宙の發展と是認し、樂天的思
想を有したるかと思はしむる、否な實に斯くの如く解釋して以て西洋の汎神教と同視
するものもあるが是れ短見にあらずば曲解である、此等の句は悉く紛々たる人生の諸
欲を解脱したる自然の風光を樂みたるに過ぎぬ。此自然を愛慕したる所、却つて浮世
の生活を嫌惡したりと證すべきである、若し夫れ道元禪師が

十方法界土地草木牆壁瓦礫皆爲佛事と示され又た

峯の色谷のひゞきも皆ながら

我が釋迦牟尼の聲と姿と

と説かれ、蘇東坡が

溪聲便是廣長舌。山色豈非清淨身

と吟じ、白隱禪師が

山河大地一個大禪定。上下四維十方法界是自己本有の大禪窟。陰陽造花は二時の粥飯。天堂地獄淨刹穢土。總て是れ吾脾胃肝膽

と獅子吼せられ、華嚴經には

如來清淨妙色身。普現十方無有比。充滿法界無窮盡

と説かれ宇宙を以て光明赫々たる佛陀の顯現となす所、一見是れ西洋哲學の汎神論に似たる觀ありて、東西の學者は勿論、日本の佛教家すら斯くの如き見解を有する者少からざるも是れ表面の語句に迷ふて實質の差異を知らざるものである、西洋哲學の汎

神論は、人欲の自然的發展を是認し、紛々たる人生をも神明其もの、出現と爲し、吾人の一切の欲望を神聖視し、甚だしきは大罪をすら善の分量の少きものと解する辯神的宇宙觀が多きを占めて居る、然るに大乘佛教の宇宙觀はウパニシヤド思想の混入により本體的哲學の發展せしは明かなるも、主として修行解脱の結果より見たる宗教的平等觀である。道元禪師の所謂「坐禪人權爾として身心脱落し從來雜穢の知見思量を截斷して天真の佛法に證會し」たる宗教的天才の猛烈なる信仰の光明が、常識的人欲の雲間に漏れ出で、盡天盡地全宇宙を光被したる超世脱俗の宇宙觀である。所謂見聞覺知を離れ、迷悟の邊際を超越したる格外の見地である。然るに此と彼とを同視するは、蚊と鷹とを同視し鼠と虎とを混同するが如きものである。學者須らく表裏同異の存する所を看破し、迷界沈淪の禍を避くべきである

要するに眞の超脱は事實的に宇宙人生の無常假和合罪惡深重なるを悟り常識的倫理的な世界を超脱して天地同根萬物一體の大無私の境地に安住するにあるので、換言すれば

消極を経たる積極、厭世の海をくゞりたる樂天でなければならぬ、圓覺經に所謂見^レ本心悉^ユ超^ユ生死。大智光明遍照^ク法界^ヲ。といふに歸するのである。而して斯くの如き高嶺の一角に眞如の月を眺めんとする者は是非其崎嶇羊腸たる險路を辿らねばならぬ、是れ即ち大乘佛敎の眞髓たる坐禪辨道を要する所であるが本書は茲に之れを説明するの餘裕を有たぬ、讀者各自進んで實參實究すべきである

第九章 超人の活動

第一節 超人生活と倫理生活

吾人は既に人慾を基礎として見たる宇宙の組織及び人生の發達なるものは到底吾人を満足せしむるにあらず、辯神哲學者の一切の説明、常識の想像せる一切の希望は、大半空想に過ぎざることを述べ、人生の目的は其無目的なるを看破し、其幸福ならざるを悟り、生類發展の非道德的殘酷なることを知悉して、有限桎梏の世界を超越し一切

の束縛を解脱して無我的大自由大解脱の境地に安住するにあることを論述した、されば此境に達したる超人より見れば、肉體の如きは死生共に毫も意とする所ではない、况んや存命中山水に隱るゝも市街に奔走するも、悉く是れ解脱界の風光である、大智禪師が此境の感想を述べて

三界悠悠不定蹤。或居^ハ林下^ハ或城中^ハ。花街柳巷東西走^ニ。古路揚^ク塵勃々風^ヲ

又

會^レ慣^レ南能避^ク世難^ヲ。暫^ク辭^ク雲水下^ニ人間^ニ。一瓶一鉢隨^フ緣住^ニ。到處無^ク心即是山^ニ

又

幸作^レ福田衣下身^ヲ。乾坤贏得^ニ一閑人^ニ。有^ク緣即住無^ク緣去^ク。一任清風送^ク白雲^ヲ。

と咏せられた、此の大解脱大安樂、眞に欽羨の至りである、人若し此境地に達せば三界悠悠、時には林下、時には城中或は雲水或は人間、恰も白雲の清風に送らるゝが如く、緣に随つて出沒自在である、白樂天も亦逍遙歌に於いて

亦莫戀此身。亦莫厭此身。此身何足戀。萬劫煩惱根。此身何足厭。一聚虛空塵。無戀又無厭。始是逍遙人。

と詠じたのは大いに禪意を得たる者と言ふべきである、道元禪師が

この生死は即ち佛の御命なり、これをいとひすてんとすれば、即ち佛の御命を失はんとするなり。これにとひまりて生死に着すれば、これも佛の御命を失ふなり。佛のありさまをどごむるなり。いとふことなく慕ふことなき、此時始めて佛の心に入る

又修證義に

生死の中に佛あれば生死なし。但生死即ち涅槃と心得て生死として厭ふべきもなく涅槃として欣ふべきもなし、是時始めて生死を離るゝ分あり

と示されたるを見れば余の所謂超人の生活なるものは略窺ふことが出来る、即ち人生を嫌忌する厭世家にあらざると共に人生に執着する樂天家にもあらざることが明らか

である、然るに大多數の佛教家が、世間の人々より佛教は消極的なりと言はるゝを厭ひ、佛教は活動的なり、人生は即ち淨土なりなど、佛教の本旨を誤り經典中諸處に散在せる語句を集め甚しき曲解を施して超人生活と通俗生活を同視せんとするは是れ實に佛教の賊といふべく聴くども嘔吐を催さざるを得ぬのである、如何に大乘佛教なりと雖も通俗の人生を其儘是認するものではない、かゝる人生を救済し、大解脱の境に導かんとするが佛教の目的ではないか。故に俗眼より見れば、佛教の厭世的傾向を帯び消極的色彩を有することは、掩ふべからざる事實である、併し佛教は是れあるが爲に能く一切の宗教に超越して迷界の衆生を救済することが出来るのである。然らば佛教は社會の實生活と如何なる關係を有し、如何なる態度を以て之れを救済せんとするか、吾人は進んで之れを論じなければならぬ

既に前章に於て詳説せるが如く宇宙は唯一の心的活力であるが、差別の現象界に現はれては利己利他二元の力と顯はれ利己的活力を中心とし利他的活動之れが伴となり相

互出入融合して茲に生物界の發展を遂ぐることゝなつたのであるが、生物の此世界に現はれてより何億萬年なるを知らざるも其久遠の歲月に於て、猛烈なる利己的活力が動物界を作用し、其慘憺の狀は眞に言語道斷と云ふべきで今日といへども試みに亞弗利加の深山中に一夜を明すとせんか、豹狼に逐はるゝ羊の叫び、虎に噛まるゝ猿鹿の悲鳴、獅虎相戦ふ修羅の叫喚は間斷なく耳朵を襲ふて眞に寒毛卓立の慘を極むるとであらう、斯かる獸群の中より一類の社會的動物が格外の進歩を爲し吞噬相搏の活動の中、些少ながらも同情相憐の行動を演出したるものは即ち人類である、斯くして鳥獸と異なる社會的發展を遂げ今や單に個人間のみならず國と國との間に於ても道德的交際を爲し四海同胞の宏大なる理想を實現せんとしてあるは實に驚くべき發展と言はねばならぬ、熟々人類發展の跡を察するに彼等が先天的運命たる不明と束縛と苦痛とを打破し解除して一步は一步より明瞭、自由、快樂の方面に向つて向上しつゝあるのである、人類の活動とは此三寶を得んとせる奮闘努力に外ならぬ、されど彼等が明智は

其活動によつて愈琢磨せらるゝも、自由と快樂とは愈進むに従つて其反對なる束縛と苦痛とは影の形に隨ふが如く益増進する傾向がある、吾人はショーペンハウエルの如く苦痛のみ増進するとは思惟せぬが、快苦相並んで増進することは疑ふべからざる事實である、見よ文明の今日と雖も過去に於ける如何なる動物も爲し得ざりし殺戮を爲しつゝあるではないか、國家の爲めと謂へば如何にも美なるが如く思はるゝも是れ實に動物の生存競争及び弱肉強食そのまゝの曝露であつて、更に宏大に更に殘酷なる現象である、有史以來數千年間戦争無きは僅かに二百七十餘年であるとは歴史統計の示す所である、縦し戦争は稀有の事實なりとするも、平和の競争の爲に世界の人類が呻吟懊惱しつゝあることは目もあてられぬ有様である、斯くして薄弱なる民族が征服せられて終には滅亡の悲運に陥り優強なる民族のみ繁榮するのであつて、過去の歲月は斯くして動物と人類とが繼續し來たり、今後永遠の後まで此道を辿るの外はないであらう、而して暫時的なる優強民族中にも生存競争の爲に自づから其の生命を斷つも

の年々歳々幾十萬といふ多數に上るのである、されば假りに人類が自由と快樂との獲得を可能なりとするも、一將功成つて萬骨枯るゝの譬、無數の同類を斃して二三の優強民族のみ發達し暫時にして更に他の優強民族若しくは其内部の一族の爲に倒され其等も亦大自然の壓力の爲に全生物と共に悉く死滅する時ありとすれば宇宙は實に一大惡魔の嘲弄と言はねばならぬ、萬一斯くの如き順序を踏まずとするも動物進化の狀況及び人類の六千年の歴史に徴するも毫も苦痛の減少を證據立つることができぬ、されば遠き未來に於て天國の此世に出現するが如きは全然空想と見るの外はないであらう然らば宇宙の真相及び世界の始終を徹見せる佛教の超人は斯くの如き自然の大潮流より一躍して靈界の彼岸に上らんとするのである、是れ彼等が生物の大目的たる種の存續を捨て單刀直入宇宙其ものの本流に躍入するのである、是れ動物生活を根據とせる人間生活より見て消極的厭世的と見ゆる所以である、然るに西洋の一神思想の産兒たる汎神哲學の餘弊に感染せる現代の佛教家は超人生活と常人生活を同視して自然其

ものを佛陀とし、自然の災害は人類が佛陀の意志を知るによりて除滅し得べく、人意の罪惡は少數人の不明と過誤とに出づるのであるなど、短少なる時間と短少なる空間とに於ける短少なる觀察を以て世界先天の活動と生物本具の性情とを抹殺し去らんとするに於いては眞に憐れむべき妄想と言はねばならぬ

然して倫理的生活なるものは此大自然の潮流に乗じて進みながら九分の利己的生活に一分の利他的活力を加味し近きに施して遠きに到らんとする人力の自然的努力である此の奮勵努力の結果はおぼろげながらも四海同胞の觀念を生せしめたのは蠢々たる鳥獸蟲魚の間に介在して眞に萬綠叢中紅一點と言はねばならぬ、斯くして彼等は事實に於いて家族内には異體同視の親和を爲し、天地同根萬物一體の眞理の倫理化は此處のみに往々具體的事實として現はるゝに至つた、進んで薄弱ながらも國民一體の觀念に進み幾多の競争と反目とを爲しつゝも多少の親密を維持し外敵に對しては一致結合して之れを防ぎ、時に身命をも惜しまざるものあるに至りては之れだけ自己が擴大せ

られ、従つて一面には自由と幸福との増進を來したるものなれば、此方面に於ては、佛教の大眼目たる大解脱大自由の境に一步を進めたるものと言ふべきである、されど人類が動物的肉體を維持し種の存續を爲しつゝある間は多少の自由は得るも決して理想の境地に進むことが出來ぬ、故に其絶對の解脱を得せしめんが爲には人間世界を飛び超て涅槃の彼岸に逍遙する超人を作るに盡力すべきは眞の佛教が人類に對する第一任務である、されど斯くの如き人物は之れを得ること極めて難きを以て、先づ自然の大潮流に乗じて浮かびつゝある倫理的人物を鼓舞し慰諭して速かに現實の世界に天國の建設を爲すべきことを勸むべきである、而して精神的競争益進み人智愈増進して人類進化の苦痛多きを經驗的に自覺すると共に相互相隣の同情隨つて強まり終に相携へて動物的向上努力を排し、茲に大自由大解脱の境に達せんことを謀るに相違ない、其超脱の方法は今日に於て豫じめ知ることが出來ないが、兎に角斯くの如き大自覺するの期あるべきは之れを豫言することが出來る、超人が倫理的人類を鼓舞し慰諭するは

今日の如き社會的活動其ものが目的ではなく、今日人類の進みつゝある道程の甚だ險惡にして不利なるを自覺して翻然として一轉機を造るを目的とするのである、此意義に於いて現人類の動物的向上の中にも一點解脱の光明を見出すことが出來ると思ふ世人或は予の説を以て甚だしき消極的奇矯の言となし、大乘佛教は決して斯くの如きものにあらずとなすであらう、如何にも大乘佛教徒は平常心是道、生死即涅槃等の語句を以て倫理人に向つて、日々の生活を以て倫理的に過ぐす所即ち是れ佛作佛行なりとして社會生活を是認して居る、殊に現代の日本の佛教徒に於ては顯著なる觀がある是れ素よりウバニシヤドの思想及び佛教の倫理的一元論の結果ではあるが、併し佛教の本流は此本體論ではなく、修業解脱の主觀の一境に存するのである、故に此見地より之れを次の二様に解釋すべきである

一は大悟徹底せる絶對無我の境より眺めたる觀察であつて、生滅變遷善惡苦樂、苟くも宇宙に起りたるものは、起る因縁あつて起りしものにして我にして解脱せる以上は

宇宙一切の事は毫も我を煩はすに足らずとして之れを是認せる絶対平等觀で、解脱人其の人の主觀的光景に過ぎぬのである、第二の解釋は衆生の出現は業因の然らしむる所で生死の世界は無限に永續するもので決して人力の如何ともする能はざる所、而も道徳的生活は世間法中最上最正の生活であつて、超人的生活も畢竟此生活と同義異態なるに過ぎずとするので所謂宗教と倫理とを同視せるもの、即ち宗教の道徳化したるものと見るべき見解である、今之れに就て批評して見るに、第一の考へは眞に超人の主觀的光景であつて、此れが客觀的にも同様の價值あらしめんには客觀世界の人類を悉く超人同様に絶対平等の境地に安住せしむべきである、然るに此世界の人類は悉く此境地に到達したる曉は宇宙と自己とを一致せしむる絶対平等の見地なるを以て決して自己の動物的肉體に執着することすら爲さず、況んや性慾を逞ふし、種の存續を謀るが如き生殖の活動は絶対に中止せらるゝこととなり、動物的生活は茲に其の終りを告ぐるであらう、第二の宗教道徳同視論は現代學者の主張する所であるが其の迷妄な

るは言ふまでもない、基督教を始め、それ以下の宗教は眼光人類の外に出でず、甚だしきは一民族一國家を相手とするに過ぎぬものであれば、彼等が理想の終極は人類或は國家に止まり倫理的生活はやがて宗教的生活なるべきも、佛教の如き教理深遠慈悲宏大なる宗教に至つては獨り人類のみならず、一切生物をも相手とし之れを救済せざんば止まざらんとする目的を有するもの、如何にして倫理的生活を以て之れが終局の理想と爲し得べしや、されば大乘佛教が倫理生活を以て解脱生活と同視せんとするは一方の方便説たるに過ぎぬのである、若し眞に倫理生活にして眞個の解脱生活たり得べくば佛教僧侶は其根本原理より演繹して肉食妻帯の家族的生活を營み種の存續を謀るべきである、即ち是れ眞實なる生活であつて、獨身生活の如きは不具的生活で釋尊を始め過去三千年の間の高僧知識は悉く僞生活乃至は不具生活を營みたる者と謂はねばならぬ、されど斯くの如き宗教道徳同視論は生物の起原と終局とを徹見せざる生活觀である、動物進化の非道徳的にして殘酷極まる活動なること、人類生活と雖も九分

の利己的排他的活動と一分の利他的共同的生活との結合にして、有形無形の戦争は不斷に人類の生命と精神とを惱まし弱肉強食の野獸性は種々變形して世界に行はれつゝあつて、道徳は單に強者團體の内部及び勢力平均せる者の間に於てのみ行はるゝに過ぎぬ、されば如何にして社會生活を以て解脱生活と同視することが出來やう、且つ人類が動物的肉體的組織を有し、野獸性に根ざせる性慾、競争心、名譽、權勢等の心的活力を有する限りは世界は永遠に修羅場たるを免かれぬであらう、人或は文明益進み交通機關愈發達し人口と食料との平均増進を來たし、従つて同情の念漸次増大し來らば戦争は世界に其跡を絶ち、人類は永遠に平和の光榮に浴すと云ふだらうが、斯くの如きは果して何千萬年の後に屬することか何人も之れを豫言することが出來ぬであらう、縦し肉體を殺戮する戦争が廢せらるゝとするも、人類が動物的組織を有する限り名譽心、競争心等は愈發達するに相違ない

されば肉體殺戮の戦争が一變して精神懊惱の無形の大戦争が開始せられ、終に其の苦

悶に堪へずして肉體の自殺を謀るもの現代の戦争に幾倍なるやを知らざるに至るであらう、それとも一部の進化論者の想像する如く、人は永遠に進歩して肉體組織を解脱し、靈的存在物となるの時期があるとすれば、或は唯佛與佛の社會となりて、解脱人の信仰を具體化したる世界を現出するかも知れぬ、併しながら過去數千萬年の生物發展の跡より察すれば、モネラより人類に至る無量の階段中全體として、人類は肉體に於いて分量組織共に少量簡單なるものと言ふことは出來ぬ、骨組の分量は其の中に位し、其の組織は最も複雑なるものと言ふべきであらう、過去によりて將來を推せば、人類が肉體を脱化するといふが如きは殆んど空想にして、縦し可能なりとするも、其の以前に地球の破滅を想像するの却つて正當なるを思はしむるのである、されば肉體の存在する限りは、佛教の大目的、大理想は永遠に實現せざるものと言はねばならぬ茲に於てか釋尊が臨終に當り

我今滅を得ること惡病を除くが如し、此れは是れ應に捨つべき罪惡の物なり、假り

に名つけて身となす、老病生死の大海に没在せり、何ぞ智者あつて是れを除滅するを得ること、怨賊を殺すが如く、歡喜せざらんや

と教訓せられたのは、決して厭世消極の思想と見るべきでない、有機的生命の全體に對する死刑の宣告と見るべきである、要するに大乘佛教が人生に對して積極的見解を有するは絶対無我の境に住したるものは、必ずしも小乗教の如く此の世を厭離せず、且つ我れ既に解脱したる以上は他人をも解脱せしめんとの利他的、活動的態度であつて、決して世間的生活を以て宇宙最高の發現とし、宇宙の目的の存する所なりとして之れを重視し執着する道德的生活とは同一視すべきものでない、斯くの如き見解を下すに至りたるは近代佛教家の一部分に止まるのである

夢想國師が

實の淨土は心のうちに候ゆめく心の外に求むまじきにて候、何の念もおこさず、萬づ見す聞かず、有りとも無しと思はず、我身主なく、めくらにひとしく、なにの

跡もなく、とゞまる所もなくして候はん、人の至る所か、やがて淨土にて候、此の世界を離れて別に淨土はなく候、斯やうに知り候へばねがふべき淨土もなく、いとふべき娑婆世界もなし、たゞ萬法一心にて候

と説かれた如き、是最も積極的に描寫せるものであるが、要するに執せず厭はず無心なる態度なれば、此の世も淨土なりといふ極めて淡泊なる解脱觀である

道元禪師も

佛となるに最と易き道あり、諸の惡を作らず、生死に着する心なく、一切衆生の爲めにあはれみ深くして、上を敬ひ下を哀れみ、萬づを厭ふ心なく、心に思ふことななく憂ふることなき、是れを佛と名づく、復た外に尋ぬること勿れ

と示され、華嚴經には

生死菩薩園林 無厭捨故

とある、是れらを見れば、佛菩薩即ち超人は、此の世を淨土と稱し、園林と稱するも

單に生死に着せず、生死を厭はずてふ淡泊なる心境を示すもので、生死の人生が、宇宙最高の發現なり目的なり、などいふ觀念は、夢にだも有ることは出來ぬ、否如何なる大乘經の文句、大乘教徒の見解も、現代佛教家が解釋するが如き、一神教又は目的々宇宙觀と同視すべき性質のものは、一として見出すことが出來ぬ、若しそれ大乘經典の匿れたる著者をして、今日の生物進化論を知らしめたならば、彼等は恐くは更に數層の厭世的哲學を組織したに相違なからう

要するに、余は斷じて倫理的生活を以て超人生活と同視することは出來ぬ、唯動物的生活中の最高なるものと認め、此の生活を高めて人類の同情、慈悲の念を益々高め、漸次個人的に超脱せしむると共に、終には世界的に超脱生活に赴かしむる最高の階段方法として、之れを獎勵するといふに過ぎぬ、故に超人其の者の終局目的は、個體の保存、種の存續、及び倫理的生活にあらずして、一切人類をして個體的に、團體的に超人の境に導くにあり、且つ是れが階段的方便として、倫理生活をも鼓舞獎勵し、倫

理的人物の繁榮をも計るのである、されば眞の超人は自己の生命を惜むにあらず、厭ふにあらず、唯一切衆生を救濟せんが爲めに、生存を全ふせんとするに過ぎぬのである故、超人の社會的活動は、徹頭徹尾、一切衆生を救濟するに存するので、一見世に執着したる如く、汲々乎として東西に奔走して、席暖なる暇がないのである

道元禪師の歌に

おろかなる我れは佛にならずとも

衆生を度する僧の身なれば

とあるは、自未得度先度他の大願心で、自己佛にならざる前に、先づ衆生を度せんと
の熱烈なる大慈悲を咏じたのである、又華嚴經に

菩薩是の念を作すべし、我所作は本と衆生の爲めなり、是の故に我應に久しく生死
に處して、方便利益して皆無上の佛道に安住せしむべし

とあるを見ても、佛菩薩即ち大超人が生死に處する目的が明かであらう、要するに人

類が種の存続と腦力の實現とを目的として社會生活を營む限り、人爲淘汰、自然淘汰の魔法にかゝつて、常に修羅の巷に彷徨し、永遠に解脱の境に達することが出来ぬ、唯人智の進歩に従つて、終には其の苦痛にして愚なることを悟るの期に達するを一轉機とするのである、此の未來の時期を夙に個人的に實現し、社會生活より躍出して種の存続を斷じ、一切の倫理觀を超絶して永遠に超脱の境に入り、一切衆生をして共に此境に誘導すべく活動したる過去の佛教中の偉人は即ち是れ眞個大乘の行者である

第二節 超人生活と日本帝國

超人生活と倫理生活との關係を述べたる上は、進んで現代に於ける最高最強の社會團體即ち國家と超人生活との關係に就いて一應論及せねばならぬ。抑も國家なるものは人類社會に於ける、最も宏大にして、最も鞏固なる團體で、如何なる平等的倫理人も如何なる超絶的超人も、之れを離れて生活することは殆んど不可能の事と言はねばならぬ。されば、世界的に正義を實行せんとする倫理人は、時としては正義と國家との間

に挟まれ、動かすべからざるチレンマに陥ることがある。例へばこゝに二國あり、利害問題の爲めに衝突して宣戰を布告したりとて、其の一國の不正なること明々瞭々なりとせば、此の際に於ける其の國の倫理人は、果して如何なる態度を採るべきか。國家に従はんとすれば其の道德主義に背き、其の道德を實行せんとせば、國家に背くこととなるであらう。進むに門なく退くに道なく、進退此に谷まれりと言はねばならぬ而して實際斯くの如き場合には、倫理人も直に國家の權威に服従するのみならず、國家の命に従ふは國家に忠なる所以なりと稱し、忠君愛國を説き、恬として正義と愛國との間に於ける大なる矛盾を顧みざるに於ては、その無慚無愧、實に驚くの外なしと云ふべきである。嘗て加藤弘之博士此の問題を提出して、世界的宗教及び倫理學者の止めを刺したりと言はれたが、實に鋭利なる刃と言ふべきである。當時之れに對して答辯を爲したる者も少なからざりしが、多くは不得要領なるものであつた。余が見解によれば、極めて簡單に答辯し得ると思ふ。即ち斯くの如き場合には、倫理人は國家

が未だ開戦に決定せざる以前に於いて、斷々乎として之れに反對し、當路者をして其の不正不義なることを知らしむると共に、あらゆる運動によつて輿論を喚起して、之れを中止せしむべきである。恰も一家の父が不正なることを爲さんとしたる時は、家族は全力を傾倒して之れを諫争すると同様である。孔子が「父有^レ争^ズ子則^チ不^レ陷^ス於^テ不義」故當^ニ不^レ義則^チ子不^レ可^レ不^レ争^ス於^テ父」と言ひしが如く、國家に對しても亦方に争^ス臣となり、國をして不義に陥り人道に背かしめざるを勉むべきである。若し治者が之れに同意せずして、飽くまで其の主張を維持し、愈國家が戦を布告したる以上は、其の時は眞個の倫理人ならば、當に自殺して其の理想に殉すべきである。宗教家も亦然りである。苟くも佛基二教の如き世界人種を相手として、平常慈悲博愛を主張するものは、如何なる事情あるも、不義の戦に與すべからざるものである。蓋し不義てふ意義は、最も嚴密に研究すべきことで、目前一事の事に止まらず、廣く且つ深く事實の過去と未來と、原因と結果とを斟酌して決すべきで、若し眞に獨立する能はざるのみならず、

らず、此れあるが爲めに世界の禍亂を惹起すべき如き事情の弱國は、之れを併合するが却つて世界の爲め又當該國民の爲めに大なる慈悲であつて正善なることもあれば、義と稱し不義といふも、單純に論ずべからざる事である。而して眞の超人の眼より見れば、人類相戦ふが如きは、正不正に係らず、愚擧にあらざれば遊戯といふべきである。されど超人が、人類救済の慈眼より見れば、絶對に戦争を廢絶せしむることが第一の希望なるも、動物的慾望を以て充たされたる人類には、殆ど不可能事である。玆に於てか第二義の方便として、正義の戦争を主張して倫理的團體の發展を期するの外はない。是に於いて眞の超人は、眞の倫理的國家に於いて生存するの必要がある。此の意義に於いて日本帝國ほど、倫理的發展を爲したる國は、世界の何國にも見出すことが出來ぬ

抑も日本建國の状態を見るに、既に尋常ならざるものがある。神代の史傳は逸々として稽ふべからざるも、所謂神話そのもの、中にも、自ら一貫せる眞理ありて、歴史の

材料たるを得るものである。皇祖天照大神より 皇孫瓊々杵尊に下し給ひたる勅に

葦原の千五百秋の瑞穂の國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜く爾皇孫就いて治らせ。行きてませ、寶祚の隆へまさんこと、當に天壤と窮りなかるべし（日本書

記）

とある。歴史以前の神代に於いて既に「是れ吾が子孫の王たるべき地なり」との自覺を有し、此の土に臨み給ひしこと、及び「就いて治らせ」とありて、暴力的征伐を以てせずして、仁愛統治を旨とし給ひしことの如き、實に是れ雄大宏遠なる建國の思想と謂ふべきである。教育勅語に「皇祖皇宗國を肇むること宏遠に徳を樹つること深厚なり」と仰せられたのは、即ち之れを指し給ひし御詞である。斯くの如き超歴史的神徳と因縁とによつて生立せる國體なるを以て、爾來 百二十二代、二千五百餘年の長日月の間、皇統連綿として一絲亂れず、君臣の分、嚴として立ち、未だ嘗て皇位を侵す者なく、人民其の徳を仰ぐこと恰も天日を仰ぐが如く、皇位の絶對なること恰も

天の絶對なるが如き觀あるは、實に世界史上未曾有の現象であつて、眞に不思議と云ふの外ない。然るに世界萬國は、悉く生存競争、弱肉強食の結果として成立し、搏噬爭奪之れ事となすもの、故に盛衰興亡、唯實力の増減によるもので、何等深遠なる道徳的理想を以て發展せるものがない。故に有史以來二千年と繼續せる國は一もなく、羅馬帝國を除くの外は、悉く千年以内、甚しきは數百年、數十年の運命を有するに過ぎぬのである。要するに全世界に於いて最も深遠雄大なる建國の理想を有し、同時に之れを具體的事業として實施せるは、わが日本帝國あるのみである。されば眞個の超人が、人類救済の手段として、倫理的團體を發展せしめんとせば、先づ日本帝國の如き道徳的國家によらなければならぬ。想ふに佛教の如き最高の宗教が、滅亡せる本國に跡を絶して、今や獨り日本帝國に發展しつゝあるが如き、或は基督教の如き倫理教も、漸く我が日本に同化し、特殊の發展を爲さんとするは、洵に深き意義あることである。兎に角、眞個の超人は、最高最終の理想を實現する順序として、先づ最も道徳

的なる日本帝國の道德的進歩發展を計り、以つて人類解脱の基を造らなければならぬ。此の目的を成さんが爲には、之れを妨害する者に對して、堂々として膺懲の戦を起さねばならぬ、併しながら其の戦は好んで爲すにあらずして、已むを得ざるが爲めに出づるので、明治天皇が日露戦役中に

四方の國皆はらからと思ふ世に

など波風の立ちさわぐらむ

と詠じて四海同胞、人類平和の御希望を漏らし給ひしも、畢竟戦は世界の平和、人道の爲め已むを得ずして行ふものなることを指示し給うたのである。されば眞個の超人が、眞に人類を救済すべき天與の道場は、わが日本帝國なるを知るべきである。然るに多くの俗人及び倫理人は勿論、所謂佛教家即ち超人たるべき者までも、日本帝國を以て普通一般の歴史的國家となし、國際戦争を以て生存競争、弱肉強食の動物的活動と見做して、一旦戦あれば、何等の自覺も反省もなく、宗教的大理想を捨て、盲目的

に戦を謳歌するは、實に憐れむべきものと謂はなければならぬ。超人は當に人類解脱を最終の目的とし、俗人倫理人及び國家を導くにも、此の大目的に反せざらんことを勉むべきである。而して日本以外の解脱人は其の國をして各日本國の如くならしめ、以て最終の理想を實現すべきは勿論なるも、各國の過去の歴史を顧み、現代の狀態に照せば、彼等をして日本帝國の如く倫理國たらしむることは、殆ど不可能と見なければならぬ。故に日本以外の超人が、眞に其の理想を實現せんと欲せば、須らく彼等解脱境に住する者のみ、全然如何なる國家にも屬せざる絶海島嶼に住し、一種の超脱國を形成して、独立的超人的生活を營み、以て世界各國に對して非倫理的行動なからしむるが如く教導するの外はなからう。否之れが最上無比の良法である。日本國民も若し天與の倫理的天職を忘れ、動物の俗人的行動を爲して止まざらんには、超人は須らく此の國以外に一小理想境を形成し、世界救済の道場と爲すべきである。想ふに佛教の如き、人類救済の大宗教は、正に此の種の方法を採るは自然の順序であらう。此は

聊か空想に似たるも、人類思想漸く進み、動物的競争の愚を悟るに至らば、必ずや此の方面に向つて一大工夫を廻らすに相違なからう。されど是れ永遠の後に屬すること、現下の急は、日本帝國をして堂々と發展向上せしめ、萬邦の民を徳化し、以つて最高理想の成遂に努力すべきである。

第十章 結論

宇宙一元の靈力一度器械世界と現はれ、永遠の歳月を経て草木となり、更らに進んで下等動物となり、幾百萬年を経て竟に人類となり、幾多の奮闘の結果倫理人となり進んで解脫人となり、久遠の最後に地球に先つて永久の大涅槃界に歸入する。之れを宇宙の一期となし更らに第二期第三期と無始無終に亘りて無限の活動を爲すは宇宙の真相であらう。而してかゝる宇宙の活動は抑も如何の目的ありて然るや。想ふに無限絶對の宇宙に目的などのあるべき道理がない。強ひて名くれば斯くなさんが爲に斯く爲

すのである。スペンサーの所謂「活動の爲に活動するは遊戯なり」といふ意義に従つて余は暫らく之れを呼んで宇宙の遊戯と爲すのである。而して人類は最後に現はれたる俳優であつて宇宙の演劇は彼によつて其終りを全ふするのである。而して其主なる観客も人類自身である。されば笑ふも泣くも打つも打たるゝも愛するも憎むも、殺すも殺さるゝも皆是れ一場の演劇にして悲喜苦樂悉く一の興味たらざるはない。泣いても喜ぶは観劇者の心理である、斷腸悲哀の悲劇程観客をして無限の興趣を感せしむるものである。唯劇の何たるを解せざる小兒は之れを眞事實と思ひ、ひたすら喜劇を喜び悲劇に至つては恐怖哀痛見る能はざるに至るが常である、是れ演劇を以て假の遊戯と知る能はざるが爲である。況んや自ら其局に當りて俳優たるに於ては到底其任に堪ふるものでない。然るに成人は演劇の假の遊戯なるを知るを以て之れを歡且つ演じ得るのである。之れと同様に宇宙を一時的劇場と見たる解脫人は人生の喜劇も悲劇も意とせずして之れを輕快に眺め得るのである。「生死は菩薩の園林なり厭捨なきが故に」と

いひ生死として厭ふべきもなし涅槃として欣ぶべきもなしといふ解脱人に於ては宇宙人生の活動は喜憂苦樂の外である。而も解脱を要したる悲劇なるを以て眞個の超人と雖も人生に對しては一種消極的色彩を有するは當に然るべき所である。而して此を自覺せる俳優の役目はまだ自覺なき憐むべき俳優をして世界は一時的劇場にして彼等も亦強ひられたる一俳優に過ぎざることを自覺せしむるにあるのである。斯くして人類が悉く此理を覺りたる曉に於ては此悲惨なる演劇は全然中止せらるゝことゝなるのである。蓋し演劇なるものは必ずや實社會なる背景と觀客なる對象とを有して始めて成立し得るも人生の演劇は一切活動即演劇にして一切人類悉く俳優たるを自覺したる上は他に何等の背景なく觀客なきを以て自然に廢止せらるゝは理の當然である。即ち解脱人は生殖の慾なく、肉體及び子孫存續の執着なきが爲に個體的生命は茲に其終りを告げ動物的遊戯は全然此世界より消滅することとなるであらう。されど宇宙は賢くも又恐しくも微妙不思議なる動物性的慾の興味を生物の身中に注入したるを以て非常の

大勇猛者にして而も時節因縁當來せずんば躑躅一番解脱の彼岸に飛び上がることが出来る。されば釋尊を始め其の前後の世界の解脱人は理事の二面より解脱の大法を示したるに拘らず數十萬年の間生の興味に感染したる人類は今や一切解脱の教法を以て生命即個體的生慾の教法と誤解して世界を再び動物の世界とならしめんとして居る。されど前に述べたる如く是れ畢竟世界的解脱の第一歩なれば永遠の活動の後に纏ては解脱人の靈的世界となるであらう。是までは大勇猛者は個人的解脱を遂げ人類濟度の大任に當るべきである。衆生病故我病、超人も此病の爲に活動すべきである。斯くして世界の活動は一週し終り最後に宇宙本源の靈力に歸する。之れを宇宙の一期と爲すのである。

斯くして一週し終ると雖も宇宙は本來無限的活動の本源なるを以て一切の機械的生物的活動が再び或時機を経て同様なる形式に於て活現し、更らに同様なる經路を経て活動し同様なる解脱によつて局を結び、斯くして無始無終永遠不斷の大活動を爲すので

ある。論者或はベルグソンの創造的進化の説を提げ宇宙を無限の進化とし同一経路を繰返すが如きは絶対に無しと言ふであらう、如何にも絶対同一完全一致の如きは可能なるも春夏秋冬の年々歳々變化しながら略同様なるが如く、世界の構成も多少の差異はあるも殆んど同様の経路を繰返すものと見るが正當であらう。現に世界の時々刻々年々歳々の變化の経路は大體の形式に於て繰返し其内容に於て極めて微細なる變化を爲すに過ぎざること是一切事物に就いて之れを證することが出来る。之れに由つて見るも後現世界の活動もほぼ類推するに足るのである。されば之を永久の進化と見るが如きは一種の迷妄と言はなければならぬ。蓋し進化とは有限の時間に於ける目的的活動の或期に名けられたる名稱に過ぎぬ。無始永劫の時間に於て或時を指摘して進化の頂上と見做し得べくば同様の權利を以て如何なる時期をも進化の頂上と見做し得べく、又同時に進化の頂上とも見做し得べきことは恰も無限の空間に於て甲點を其中心と見做し得べきと共に一切所を悉く中心と言ふことが出来ると同様である。故に世

界一期の中に於て暫らく進化の名稱を附し得るも永劫宇宙の活動に於ては漸次的變化を言ひ得るも斷じて進化と名くべきでない。西人の歴史的生活に因由せる我執的哲學は常に目的と進化との二大概念を以て宇宙を解釋せんとする傾向あるも斯くの如きは畢竟大悟徹底せざる若き思想である。永劫無限全一の宇宙の活動に彼等のいふが如き人間的や進化のあるべき理由なきことは既述の通りである。

以上は是れ宇宙を客觀的に觀たる一元的開發論である。宇宙は果して一元なりや二元なりや將た多元なりや畢竟是れ吾人の意識活動の類推に過ぎざるべきも、かゝる認識論上の議論は茲に略し三千年間の哲學的能力の所産たる一元論を是認して立論したる次第である。既に一元論なる以上は世界の罪惡の存在は斷じて積極的に説明し得る性質のものではない。従つて解脱論となるは論理上必要の経路である。元より世には一元論より自由論に進み樂天觀に達する者も少くないが、斯くの如きは説明し得ざる世界の害惡及び其害惡の爲め苦悶しつゝある無量の同類に對し慈悲同情の心を有するを

得ざる利己的凡庸者流である。苟くも釋尊の如き宏大の慈悲を有する大偉人は必ずや解脱の大法を説かずに居られぬ。此意味に於て佛教の諸聖ナザレの基督、獨のカント支那の孔老莊の如き曠古の大思想家は悉く同工異曲と言ふべきである。然るに日本現代の佛教家は大乘の人生觀を西洋の樂天哲學の如く解釋し去ならんとする者が多い。元より解脱入信の境地よりは然るべき事ながら而も其内面は常に解脱の風光を有すべき筈である。且つ彼等が吾人の終局の理想たる全世界的解脱の靈界を以て直ちに紛々擾々たる現實の差別の中に認めんとするは實際的宗教とし又哲學的理論として興味なきにあらざるも、其融通的相即的態度は現實社會の不平等なる制度文物の改良を促がすの力がない。想ふに大乘佛教は深遠なる汎神的神想と悲觀的なる解脱思想と二元的結合によりて成立せるが爲に教理の相即融通によりて一切の現實を是認して何等改良發展の實際的活動に出ない。煩惱即菩提、生死即涅槃、現實即理想、差別即平等此土即寂光淨土にして圓融自在平穩平事である。經濟的不平等も專制的政治

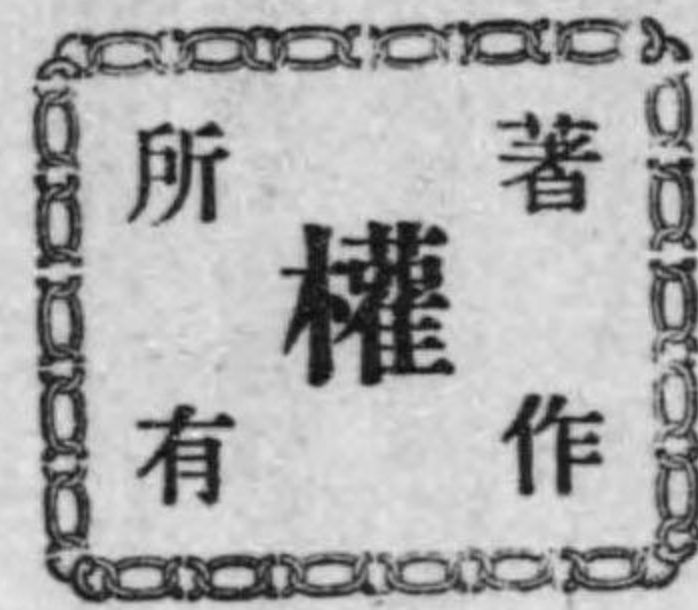
も人權の束縛も道義の蹂躪も罪惡の横行も彼等に對しては何等革進的思想を想起する刺激とならぬのである。是れ彼等が身既に個人解脱の境に入りたるが爲か否其解脱墮落も相即自由にして毫も意とする所ではない。嗚呼相即の弊も亦至れりといふべきである。人或は吾人が無我的解脱を理想としながら尙且つ目的的活動を鼓舞するを以て甚しき矛盾となすであらうが如何にも吾人は終局の理想としては全世界的解脱を主張するも此理想遂行の手段としては目的的活動と道德的努力を獎勵するものである。是れ第九章に於て説明したる所である。無我の境地に體達したる釋尊の立教革命の大活動は即ち吾人佛教徒の模範的活動である。されば解脱的理想界の此の土に實現するまでは解脱人は勿論一切の倫理人も不惜身命の活動を爲すべきである。

宇宙人生論（終）

大正五年五月二十日印刷
大正五年五月廿四日發行

定價金壹圓

郵稅金八錢



宇宙人生論 附

著者 祥雲 確悟

發行人 永田 顯了
東京市芝區愛宕町一丁目十六番地

印刷人 黒井 大圓
東京市芝區愛宕町一丁目十六番地

印刷所 佛教館印刷部
東京市京橋區本八丁堀一丁目十五番地

發行所

東京市芝區愛宕町一丁目
振替東京二九四六番

佛教館

終